

明治期における高等女学校の体育の実際に関する史的考察

—近代日本の女子体育史研究の一環として—

大 家 千枝子*

(平成 7 年 1 月 10 日受付, 平成 7 年 6 月 29 日受理)

A Study of the Realities of the Physical Education in Girl's High School in the Meiji Era

—Connected with the Study of History of Women's Physical—
Education in Modern Japan

Chieko OIE

The purpose of this study is to examine the development of girl's physical education by girl's high school in the Meiji era when the modernization took place, and to consider what was the "Modern ages" for the girl's physical education.

The findings of the study are as follows.

The physical education of girl's high school in the Meiji era was encouraged for their "health". That, however, was not only for the personal purpose but for the national one.

A women of sound body could give birth to a healthy baby that would be a military man.

As the national responsibility, government took the Japanese nation, that was obliged to defend their country, for the military men.

Therefore, to build up the military strength, the health of women's body that would have the militaries of the future was important.

Under the circumstances, the government positively encouraged the girl's to do physical exercises; who had been conservative about it, in the name of justice. As we have seen the physical education in girl's high school that was to meet the expectation at that time, was promoted constructively; though there were regional differences.

That is to say, the promotion of physical education by government permeated the whole country. At the same time, the woman's health care was managed by government within the framework of girl's high school.

The Meiji government changed a traditional conception of women that had been "good wives and wise mothers" to the "Western" or "Modern" way, and mobilized the women to modernize the nation.

1. はじめに

文化的・社会的に制約された性差,あるいは社会的・文化的につくられた性差の問題(=ジェンダー)が女性問題研究者や女性史研究者の間で論議されるようになって久しい。しかし,そのようなジェンダーの問題が女性の体育やスポーツの研究に従事する研究者の間にまでは十分に浸透しているとはいえない。それは女性の解放が体育やスポーツの方面で最も進んでいるために,こ

さらその問題を持ち出す必要がないとの判断が働いているからであろう。しかし,そのように判断することが可能になりつつあるにしても女性を取り巻く体育やスポーツの環境をみると,生物学的な性差ではなく,文化的,社会的に形成された性差の問題はもはや存在しないというわけにはいかないのである。その典型は女性が依然として大相撲の土俵に上がることが許されていない点に見いだすことができよう。

このスポーツ界における女性蔑視の問題に関して時代

* 体育史研究室

を遡って眺めてみると、女性たちの体育やスポーツへの参加の機会が著しく制限され、また当の女性たちも積極的に参加することを欲しなかったことがわかる。いな、運動をすることの楽しさを味わう機会が断たれていたために、それに参加する欲求が湧くこともなかったのである。だとすれば、このような社会的・文化的な状況に置かれていた女性たちが、今日のように身体を運動させるようになった理由は何であったかを解明する意義は大きいといわねばならない。

この問題に関しては、これまで近代国家建設を積極的に行ってきた時代のナショナリズムが大きく関与していたとの側面から論議されてきており¹⁾、身体は国家管理に注目して研究されるようになっていく²⁾。しかし、そのような指摘は大筋において正しいとしても、現場教育の実際の中でどのように身体が管理されたのかという事柄を欠落させてしまっている場合が多いのも事実である。これに対して現場の体育の実際に言及した論文をみると、「健康の維持・増進」という名の下での身体管理が体育の授業を通して行われてきた様子が描写されているが、「国家による身体管理」という明確な視点が欠けているのである。

そこで本研究では近代国家建設に向かった明治期に女子の体育が高等女学校における教育の現場でどのように展開されたのかを明らかにし、女子体育にとって「近代」とは何であったのかに考察を加えようとするものである。

2. 高等女学校における体育振興の理論的背景

高等女学校は明治24年の「中学校令の改正」(勅令第243号)により、女子に必須な高等普通教育を施す中学校の1つとして定められた。これは“高等女学校”という名称が日本の学校制度の中に公式にあらわれた最初のものである。それから4年後の28年、制度的な確立を意味する「高等女学校規程」(文部省令第1号)が制定された。この規程は男子の中等教育が、明治19年の「中学校令」(勅令第15号)によって制度的確立をみているのに比べ、約10年も遅れていたといわねばならない。また、高等女学校が実質的に機能するようになるのは、明治36年の「高等女学校教授要目」(文部省訓令第2号)の制定をみてからである。これにより、ようやくそれまでごく限られた家庭の子女にのみ可能であった中等教育が振興されるようになったのである。

いっぽう、正課教育としての「体育」は、前掲の「高等女学校規程」によって、必修科となり、大きくその一歩を踏み出した。しかしながら、「体育」についての規定

は男子に比べ、時間数や教育内容に大きな相違がある³⁾。それは、旧来の(伝統的な)女性観が大きく影響しているこの時代においては、親も世間も、そして当の女性自身までもが、運動することの必要性を認めなければ女性がすすんで運動するということはままならない状況であった点に影響されているといえよう。

そこでここでは、高等女学校において体育を振興していくにあたって、どのような理論的根拠を用意したのか、をみていくことにしたい。

1) 医学的合理主義に基づく運動の効用論

医学的合理主義に基づいた運動の効用論は、解剖学的・生理学的に有効な運動は健康によい、とする立場から論じられている。その論理はすでに明治初年代から展開されてきたもので、スウェーデン体操が日本の学校や軍隊に採用されるようになった明治30年代にはじまったわけではない。そこで、ここでは明治初年代以降において医学の立場から体育が奨励されてきた経緯について考えることにしたい。

明治5年8月に発布の「学制」をもって近代日本の学校体育がはじまった。この近代的な教育制度の中で体育は「体術」として示され、西欧の身体訓練の基本形式がこの教科目の中で教授されることになったのである。無論、この当時は学校の教員が不足していただけでなく、近代的な教育を如何に展開したらよいのかが当の教員も社会一般の人々においても理解できるのではなかったといわれている。したがって、体育に関しても実際にどのようにして教授してよいものかも理解できないままに、制度だけが一人歩きしていたといわねばならない。

このような状況を打開するために、国は体操教員のために教授用参考図書を刊行している。最初の参考書は「樹中体操法図」と「東京師範学校板体操図」であったが、そのうち前者の樹中体操法は医療体操であった。本図はドイツの医師のシュレーバー(Dr. D. G. M. Schreiber, 1808-1861)が著した「医療的室内体操」(Aerzliche Zimmer gymnastick, 1855年)の巻末に添付された図が翻訳刊行されたものであった。このことから、近代日本の学校体育は医学的合理主義に基づく運動(=体操)を手段として推進されたといわねばならない。しかし、この当時は体操理論を体得した教師は皆無に等しく、したがって学校体育が十二分に展開されることはなかった。

この問題を解決しようとして国は体育教員の養成に着手した。明治11年11月、体操伝習所を設置し、各府県の師範学校の体育教員養成が開始したのである。この伝

習所の近代的教師はアメリカのアマースト大学で医学を修めたりランドであった。彼は当時のアメリカで支持されていたダイオルイスの体操を範として日本の実情に合わせて体操を教授している。彼は自らの体操を‘normal gymnastics’と名付け、彼の通訳を担当した伊沢修二が「普通体操」と訳している。普通のひとなら誰でもできる、という程度の意味であった。この体操はリーランドが医学者であったことから運動の医学的効用から説かれたことはいうまでもないが、彼が範としたダイオルイスの体操の淵源はスウェーデン体操にあったといわれている点も注目されてよいだろう。後に取り上げるように、そのスウェーデン体操こそ運動の医学的効用が説かれ、動きを解剖学や生理学に照らして構成したものであったからである。したがって、近代日本の学校体操の方向性を生み出したとされる体操伝習所の体操もやはり医学的合理主義をモットーにして奨励・促進されたといわねばならない。その1つの証は体操教員に衛生学や生理学の知識が要求されたことにみられる。これは明治20年代に入ってもかわることはなかった。明治26年3月に設立の認可をみた日本体育会体操練習所の教科目に「修身学及ヒ教育学大要」と並んで「生理学及ヒ衛生学大要」が加え入れられているからである。

ここで要求されているところの医学とは生理学のような医学の基礎科学を指し、その応用学として衛生学であったが、いずれも西洋の医学にその根拠を求めている。日本には古来から伝統医学（＝東洋医学）が伝えられているが、それを否定して西洋医学に依拠しようとしたのである。それはともあれ、日本体育会体操練習所はその後、日本体育会体操学校に名称を改め、やがて、医学的合理主義に立脚した体操の積極的推進母体となっていた。その先駆者は医学者の川瀬元九郎であった。彼は『瑞典式教育体操』や『瑞典体操』の著書を通して、体操の医学上の効用論を説いたのである。その当時、アメリカのボストンでスウェーデン体操が盛んに行われており、川瀬の体操もアメリカで普及していたスウェーデン体操の焼き増しであった。

ボストンでは身体各部の均衡と調和的発達をめざす合理的な健康増進法としてスウェーデン体操が公認されていたが、これを代表する体操システムはニルス・ポッセの体操論(N. Posse: The Special Kinesiology of Educational Gymnastics, 1894)に基づくものであった⁴⁾。このポッセの体操は、いうまでもなく、力学・生理学・心理学に立脚した「運動の科学」(Science of movement, Kinesiology)の性格を帯びており、その主張も論理的であった。すなわち、彼は「かくて、科学化されるために

は、体操のシステムは人体器官そのものの法則に根拠づけられ、何か主観的な見解に基づいてはならない」と語り、「一般的運動学（＝スウェーデン体操）は、それが体操の法則に一致しない限り、いかなるシステムも認めない⁵⁾」と主張するにいたっているのである。

このような理論をもつスウェーデン体操は、それでは、どのような経緯で日本に受け入れられていったのであろうか。すでに述べたように、このスウェーデン体操は医師によって日本に導入された。医師の川瀬は自らによって立つ学問に照らしてこの体操に着目したといえよう。また、川瀬が体操教員養成のための主教材として兵式体操（集団の秩序を重視する体操）が選択されていた日本体育会体操学校の教師であったにもかかわらず、医学の理論に裏打ちされたスウェーデン体操に注目したのも興味のもたれるところである。この問題は、そもそもスウェーデン体操が軍隊の中で作り上げられたのだ、ということを描き出すだけで十分であろう。強力な軍隊を編制するには強靱な肉体の所有者を必要とするが、その肉体の形成には科学的（＝医学的）な裏付けが必要とされることはいうまでもない。その当時の戦力とは兵士の肉体にあったことを考え合わせると、軍隊の中にこそ運動の医学的な配慮が求められねばならなかったのである。

ともあれ、明治35年を前後した頃に、川瀬元九郎、井口あくりによってスウェーデン体操が日本に紹介された。このスウェーデン体操の紹介をきっかけに体育の合理化への動きが活発化したといわれている。その理由は次の点に求められよう。すなわち、当時、正課体育に圧倒的な権威をもっていたのは、普通体操と兵式体操であったが、普通体操は明治31年の改正によっても根本的な変更がなかったために、抹節の技術にとらわれ、その身体への医療的効果についての関心は薄らいでいたといわねばならない。いな、身体への配慮については全く無頓着であったとさえいえる。したがって、そのような沈滞した体育界にスウェーデン体操は大きな刺激を与えずにはおかなかったといえよう。

かくて、文部省は明治37年10月に体操遊戯取調委員会を設置して、将来の学校体育の方向性を再検討することになるのである。この委員会に委員として井口あくりが加わっていることは周知のことであるが、彼女がスウェーデン体操の紹介者であることによって、女子の学校体操の中心的な教材がスウェーデン体操へと傾いていくことになった。その当時の女子体育は高等女学校が設立された当初から「普通体操」と「遊戯」を課すことになっていたが、高等女学校校長会議などで遊戯がようや

く注目される程度に過ぎなかったのである。しかし、井口の努力によって女子は遊戯よりも体操が、しかも普通体操よりもスウェーデン体操が重視されるようになっていく。それはやはり、スウェーデン体操は医学的效果があると訴えることをとおして次第に当時の女子教育者の理解をかちとっていったためであるといえよう。

いずれにせよ、明治30年代後半から40年代にかけては医学的效果のない運動は無意味であるとする考えが支配的になっていったといえる。その証は純然たるスポーツであると今日ではみなされている薙刀がその運動の医学的效果を示すために「薙刀体操」と称することによってはじめて学校現場に受け入れられたことにみられよう。このように遊戯（当時はスポーツが遊戯に加えられていた）の擁護者たちは体操と同じ医学的效果をうたうことをとおして学校現場における遊戯の地位を保つように努めたのである。このことは、解剖学や生理学に基づく運動の効用論が如何に学校現場を支配していたかを物語るものである。したがって、高等女学校においても例外ではなく、運動の必要性が教師のレベルだけでなく、女学生のレベルにおいても論じられることになったのである。その典型を群馬県前橋高等女学校において課された作文（課題：運動の必要）にも見いだせるといえよう。

2) 富国強兵主義に基づく母体の国家管理

日本の富国強兵主義に基づく体育はまずもって男子の兵式体操にみることができる。兵式体操は明治19年に境にして、普通体操とともに学校体育のなかに名を連ねることになった。そして森 有礼文相の登場により、兵式体操の優越した時代を迎えることになる。彼にとって体育は単なる体育（その手段としての普通体操）というだけでなく、日本人（男子）を「国民」形成するための重要な手段だったのである⁶⁾。兵式体操を施行することは必ずしも兵士を育てるためだけではなく、むしろ、組織だった行動になじむ身体と心性を育むためであり、結果として日本の「近代化」に役立てられたのである⁷⁾。彼の死後も多少の起伏はあるものの、日清戦争に向かって祖国の興亡という使命感を担いつつ富国強兵主義の体育は明確な姿を呈しはじめることになった。

では、この富国強兵主義の体育に対して、女子の体育は富国強兵主義と係わってどのように展開したのであろうか。すなわち、どのようにして富国強兵主義が女子の体育を振興していく理論的根拠になったのであろうか。そもそも女子中等教育が公教育体制の中に位置づけられたのは、高等女学校での教育が国家の発展と密接に関わり合うものと認識されたからである⁸⁾。そして、賢母養成

の必要性を論拠として開始された学校教育は、「女が近代国家を構成する国民の一員として統合されるとき、男と違い、まず将来の国民を育てる母として統合の網の目にかめとられていくことを教えてくれる」⁹⁾といえよう。このようにみえてくると、高等女学校（学校教育）における体育は母体の国家管理という観点で眺めるのがよいといわねばならない。

先述のとおり、体育は近代的な教育制度の開始とともに正課教科として実施され、高等女学校においても当初より必修科として採用されていた。しかしながら、旧来の伝統的な女性観が大きく影響するこの時代においては社会的にも、「体育は『女らしさ』を損なう」という心性が存在していたし、和服や結髪も体育を行うにはあまりにも大きな障害であった。そのため、当初は体育は名目的な存在に近かったといわれる¹⁰⁾。

そして、明治20年代後半に高等女学校の体育に対する関心が多少示されてくるようになり、女子の体育は為政者、思想家、学者、教育者の一家言的体育論としてスタートすることとなる¹¹⁾。

その例として、28年10月18日大日本教育会は常集会を開催したが、その会で中條澄清が行った「体育について」という演説をあげることができる。彼は、「体育の事は細かに之れを論じますと国民の貧富に関係し、一国の富強に関係する」と述べた上で、女子教育のあり方について従来の女性観と新しい女性観を比較対照しながら論じている¹²⁾。この見解はこれまでの状況を一步前進させた考え方であるといえよう。

また、同年の大日本教育会雑誌第165号の中で、華族女学校校長である細川潤次郎は「国力と女子教育との関係」という論説を発表した。ここには女子体育については言及されていないが、彼の国家富強を目指す教育観には体育が不可欠のものであると考えていたことが読み取れるのである。このことは彼が校長を務める華族女学校において健康増進が体育にあることを説き、体育の奨励に努めていたことから知られ、さらにまた、明治27年の華族女学校の第1回運動会での演説の記録に、彼の体育への期待を窺うことができる¹³⁾。

このように、いずれも次代の国民を産み落とす母親に眼を向けることが重要であると捉えた上で体育の必要性を説いているのである。ここに国家的見地からの女子教育の重要性が認められるであろう。そして、これらの目的を達するためには従来の封建的女性観から抜け出す必要があったのであるが、それが華族女学校のような支配階級の子弟を預かる女子教育機関で主張された点に明治の女学校の特色をみることができよう¹⁴⁾。

このような観点からの女子体育振興の論理は日高藤吉郎が創設した日本体育会の「日本体育会ノ要旨」の補則にもみることができる¹⁵⁾。日本体育会においても将来の国民の母としての女子に体育が必要であると説かれていたのである。

明治30年代に入って、富強主義に基づく体育振興の論理は様々な人たちによって主張された。明治35年に発刊の『内外名家体育論集』に当時軍人であった丸山正彦の「女子の体育」という論文が掲載されている。この中で、彼は「女子の体育に於ける苦心は大方の人は認め得べし」と認めたとうえで、次のように述べている¹⁶⁾。

「女子は國民の母たり。女子の體育を謀らずんば、到底健全なる國民を得んは覺束なし。柔弱なる女子の腹には柔弱なる女子の生ずるは避くべからず。矮小なる女子の孕むに長大ならむことを望むも其甲斐なからむ。さすれば女子の體育は如何にしても大に獎勵せざるべからず。」

彼は現状における女性のあり方を具体的に例をあげて批判し、国家的見地から女子体育の必要性を説いているのである。

また、明治37年7月25日、久保田文相は文部省の夏期講習会において次のように体育を奨励している¹⁷⁾。

「それから又體育を獎勵することを大に力めたい、今日我邦の總ての進歩と云ふものは俄に發達することは出来ない、他の強國に顧みて遜色なしとは云へない、之を進めて往かなければ根本的發達は六けしい。即ち大に體育を獎勵し、體育を盛にしなければならぬ、又獨り學校のみならず、學校外に於ても體育を進めることに付ては種々な方法手段を取つて進めて往きたいと云ふ考である、今回の講習に於て井口教授に依つて女子の體操を講習すると云ふことになつて居りますが、此等は最も緊要な大切な事と思ふ、婦人の體格が良くならなくては國民の體格が進むと云ふことは出来ない夫故に體育を獎勵する中にも女子の體育と云ふことに最も注意を致したい、而して此の體育の獎勵と云ふことは獨り體格の進むのみならず道德上に於ても風儀上に於ても進歩改良を致して往くと云ふ所の最良なる方法手段と考へるのである。」

このように当時の文相においても富強主義に基づいて女子の体育の振興を唱えていたのである。そして、そのキー・ポイントは国家の資本としての「母体」にあった

ということができよう。

以上のように富国强兵の思想を前面に打ち出すことによって、明治期の先駆的な指導者たちは男子のみならず女子にまでも体育の有用性を説き、従来の伝統的女性像を打破する決め手にしていったのである。

同時に女子の体育は外人との比較から論じられることも多かった¹⁸⁾。それは、資本主義的競争に勝ち残るためには、身体的にも丈夫であり、新しい世界に向かっていくことのできる女性が必要とされたからである。すなわち、欧米女性と比べて体力的に遜色がなく見劣りすることもない「女性」が求められたのである。

3. 高等女学校教授要目にみる体育の実際

明治32年の「高等女学校令」(勅令31号)は、その第2条において全国に公立の高等女学校設立を規定した。また同年「高等女学校編制及設備規則」(文部省令第5号)ではその設置に35年の3月31日までという期限をつけている。そのため、明治36年までに全国に公立の高等女学校が次々と設立されていくようになったわけである。また、明治36年に「高等女学校教授要目」(文部省訓令第2号)は制定されたが、これにより全国を統一する教育内容が規定された。それまでも教育内容に関する規程はなされていたが、その規程はまだ各学校独自の様々な教育内容が教授される可能性が大きかった。ゆえに、教育内容がより詳細で明確にされた「高等女学校教授要目」の制定を高等女学校の実質的な確立とみなすことができるのである。こうして高等女学校の教育内容が全国津々浦々まで浸透していく基盤がつくられた。

そこでここでは高等女学校の体育が実際にはどれほど重要視され、どのような内容が盛り込まれていたのかを「高等女学校教授要目」をもって考察することにしたい。

1) 高等女学校教授要目における「体育」の地位

高等女学校における学科規程やその内容に関する詳細な規程は明治28年1月29日に文部省令第1号「高等女学校規程」によって初めて定められた。この規程の第1条において高等女学校の学科目は修身、国語、外国語、歴史、地理、数学、理科、家事、裁縫、習字、図画、音楽、体操から成り、随意科目として教育、漢字、手芸を加えることとしている。また、第6条に学科目の程度が規程され、これによって教育内容が定められた。

次に学科に関する規程が定められたのは、明治32年2月21日文部省令第7号による「高等女学校の学科及其程度に関する規則」であった。この規程をみると、第1条の高等女学校の学科目は明治28年の高等女学校規

表-1 週あたり授業時間数の比較※

	明治 34 年高等女学校令施行規則				明治 34 年中学校令施行規則				
	1 年	2 年	3 年	4 年	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年
修身	2	2	2	2	1	1	1	1	1
国語	6	6	5	5					
国語及漢文					7	7	7	6	6
外国語	(3)	(3)	(3)	(3)	7	7	7	7	6
歴史・地理	3	3	2	3	3	3	3	3	3
数学	2	2	2	2	3	3	5	5	4
理科	2	2	2	1					
博物					2	2	2		
物理及化学								4	4
法制及経済									(3)
図画	1	1	1	1	1	1	1	1	
家事			2	2					
裁縫	4	4	4	4					
音楽	2	2	2	2					
唱歌					(1)	(1)	(1)		
体操	3	3	3	3	3	3	3	3	3
計	28	28	28	28	28	28	30	30	30

()は随意科目

※小山静子：『良妻賢母という規範』勁草書房，1991 年 10 月，p. 51 より転載

程と同様であるが，高等女学校の学科目の程度については，第 3 条に規程されている¹⁹⁾。

ここでは，数学において高等女学校規程と若干の相違がみられる。開平開立の一端が求積と代数の初歩に変更されているのである。しかし，このほかには規程の変更はみられない。

そして，明治 34 年 3 月 22 日の文部省令第 4 号をもって，「高等女学校令施行規則」が定められた。第 1 章において，学科及其ノ程度について触れられている²⁰⁾。

この高等女学校令施行規則により，女子中等教育の制度が整頓をみたと言われている²¹⁾。学科の程度や教育内容の規程にも，従来のものとの違いを認めることができる。それぞれの教科において，その目的が具体的に明示され，そして，その内容についても追加されているからである。しかしながら，全国を統一する教育内容としてはまだ充分な規程としてみることはできない。なぜならこの規程では各学校において独自の教育内容が教授される可能性を残していたからである。

ここで，同じ中等教育機関である男子の中学校の教育内容（明治 34 年公布）と比較することにしよう。これらの教育内容を各学科目の週あたりの授業時間数で表わしたものが表-1 である。ここで，まず第 1 に指摘されるのは「体操」である。中学校も高等女学校も各学年とも週あたり 3 時間が割り当てられているからである。中学校

における「体操」の週 3 時間と高等女学校の「体操」の週 3 時間を比べると，女子の「体操」の方が全教科に占める時間数の割合が高いといえよう。高等女学校における「体操」は他の教科の中でも比較的重要な地位を占めていたといわねばならない。このいっぽう高等女学校には中学校と比べて，「漢文」「博物」「物理及化学」（法制及経済）が学科目として存在せず，「外国語」が随意科目扱いであることがわかる。さらに，「数学」や「外国語」の授業時間数が高等女学校は中学校の半分以下でありこの分「修身」「家事」「裁縫」「音楽」にあてられていることがわかる。また，「高等女学校」においてはこの表に掲げられた科目以外に教育と手芸とを随意科目として設置することが認められていたのである。

以上のことから，明治 32 年の「高等女学校令」によって全国に公立の高等女学校を設置するように規定されて以来，次々と高等女学校の教育内容に関する規程が詳細なものとなっていった。しかし，それらの規程のなかには良妻賢母育成を目標にあげながら，家事や育児などの教育が徹底されていなかった。しかしこれに比して「体操」の地位はすこぶる高かったといえよう。

2) 高等女学校教授要目における「体育」の内容

明治期には「高等女学校」に関する規程がいくつか発布されているが，同時にその中に「体育」に関する記述

を見つけることができる。

明治28年1月29日、文部省令第1号によって「高等女学校規程」が定められた。これは高等女学校の学科課程、その他内容に関する詳細な規程として定められた最初のものである。まずその第1条には「体育」が高等女学校の必修科目の1つに加え入れられていたことが示されている。さらに、第6条では体育の運動教材の大枠が「普通体操」もしくは「遊戯」として示されたが、具体的な内容や目的を提示するにいたっていない。明治28年制定の「高等女学校規程」からは、体育に関しての明確な指針を見出すことは困難であるといわねばならない。

次に明治32年2月9日、文部省令第5号をもって「高等女学校編制乃設備準則」が定められている。ここでも「体育」に関して3つの条文が用意されていた。この規程は、学校衛生についての改善が叫ばれるようになり、これをうけて関連法規が整備されるが、その一環として制定されていったものとみることができる。同様に「中学校編制乃設備規則」(文部省令第3号、明治32年2月8日)²²⁾や「改正小学校設備準則」(文部省令第37号、明治32年7月10日)²³⁾が定められているが、これらはいずれも体育施設である屋外運動場と屋内運動場(体育館)の基準を法規化したものとして注目されるところである。さらに明治32年2月21日、文部省令第7号をもって「高等女学校ノ学科乃其程度ニ関スル規則」が定められたが、ここでは「体育」に関して「高等女学校規程」(明治26年制定)と全く同様の文言がつけられている²⁴⁾。

また、明治33年3月26日、文部省訓令第6号をもって「体育」に関連する訓令が発せられている²⁵⁾。ここでは、女子師範学校生や高等女学校生に対し重なる配慮を示し、月経時における体育の禁止を訓令によって徹底しようとしているのである。体育の教育内容が整えられていないこの時期に、このような配慮がなされていることは注目に値するところであろう。

翌明治34年3月22日には、文部省令第4号をもって「高等女学校令施行規則」が定められた。これにより女子中等教育の制度が、一応の整備をおえ、この法令以前に設置された学校もこの施行規則に従って教育されるようになっていく。ここでは体育に関する条文²⁶⁾は、7つを数え、体育を教授する条件が整えられていった。高等女学校施行規則では、「体育」は「体操」科として必修科目とされている点(第1条)においては高等女学校令の場合と変わるところがないが、第13条にみえるように国が求める体育の中身がより具体的になったといえよ

う。従来のものに比べると体育の目的が明確に示され、その内容についても普通体操においては、「矯正術」「徒手体操」「哑鈴体操」を授けることとし、便宜的に「球竿体操」および「豆囊体操」を授けられることとなっているからである。各学年における毎週授業時数では(第16条)、各学年とも毎週3時間配当されており、この時数は修業年限が延長または短縮された場合でも同じとされている。また、運動場については第29条で規程されたが、残念ながら屋外運動場の場合には「相当の面積」と記されたのみで、その広さについての具体的な基準は示されず、屋内運動場の場合でも生徒控室という狭い空間を兼用することが認められているのである。しかしそれでも体育施設に関する規定が盛られている点は一步前進であるといわねばならない。

このようにして少しずつではあるが、高等女学校は法的に整備されて、明治36年の「高等女学校教授要目」の制定によって、一応の完成をみることとなる。それでは、この「高等女学校教授要目」のなかで「体育」についてはどのように取り扱われているのだろうか。以下において該当の箇所を引用しておこう²⁷⁾。

體 操

第一學年及第二學年

毎週三時

普通體操

準備法 整容法 呼吸法

矯正術

徒手體操

遊戯

行進運動及遊技

第三學年及第四學年

毎週三時

普通體操

矯正術

徒手體操

哑鈴體操

遊戯

行進運動及遊技

體操ハ凡普通體操ニ、遊戯一ノ此ヲ以テ之ヲ課スヘシ
土地ノ状況ニ依リ遊戯ニ於テ便宜游泳、氷滑リノ類ヲ
加フルコトヲ得

教授上ノ注意

- 一 體操ハ成ルヘク女教員ヲシテ之ヲ教授セシムヘシ
- 二 體操ヲ授クルニハ先ツ其ノ運動ノ目的筋肉ノ使用部等ヲ説明シ然ル後正確ニ其ノ模範ヲ示シテ之ニ倣ハシムヘシ

表-2 明治期の高等女学校における正課体育の運動教材の実際

運動教材 教授要目 各 地 域	体 操											遊 戯																	
	徒手体操※	矯正術※	哑鈴体操	球竿体操※	豆囊体操	棍棒体操	木管体操	整容法	呼吸法	薙刀体操	瑞典体操	陣取り	鬼遊	羽子つき	ローンテニス	クロッケー	ピンポン	クリケット	フットボール※	デッドボール	セッターボール	バスケットボール※	キャプテンボール	弓術・弓道	薙刀	縄跳び	綱引き	球送り	旗送り
明治 34 年	○	○	○	○	○																								
明治 36 年	○		○	○				○	○					○	○	○											○		
合 計	25	3	17	19	2	6	2	2	1	2	4	1	1	2	11	2	1	1	2	1	1	6	2	2	7	1	3	2	1

表-2 (続 き)

運動教材 教授要目 各 地 域	遊 戯																												
	徒競走	徒歩競走	水泳	スケート	橈すべり	雪合戦	胡蝶の舞	ブローネード	方形行進	十字旋回行進	蛇行進	星形行進	花輪行進	ヒールアンドトー	カドリール	コチリオン	ランサー	タンツライゲン	カレドニアン	ボルカ	グランドチェン	キューバダンス	ベビーダンス	メーボルダンス	コントダンス	ノーマルダンス	フォックストロット	スケーチング	ボロネーズ
明治 34 年																													
明治 36 年																													
合 計	4	7	3	1	1	1	1	5	1	1	1	1	1	3	22	11	9	6	5	4	2	2	1	2	1	1	1	3	1

※ 徒手体操……普通体操を含む 矯正術……美容術を含む 球竿体操……ワンズ体操を含む
 フットボール……キックボールを含む バスケットボール……ゴールハイを含む

三 一運動ヲ始メテ授ケル場合ニハ精密ニ注意シテ些少ノ誤謬タリトモ寛假スルコトナク之ヲ矯正スヘシ

四 体操ニ於テハ生徒ノ體力ニ留意シ過度ノ運動ヲナサシムヘカラス虚弱ナル生徒ニハ特ニ留意シテ初ヨリ強キ運動ヲナサシメス漸次之ニ堪フルニ至ラシムヘシ

生徒身體ノ定期的異状アルニ際シテハ体操ヲ休止セシムヘシ

五 既ニ授ケタル運動ハ反復練習シテ之ニ熟達セシムヘシ然レトモ長時間連續シテ同一ノ運動ノミヲナサシムヘカラス

六 教授ノ回数ハ毎週凡六回トシ成ルヘク同一教授時間ニ於テ普通体操及遊戯ヲ併セ課スヘシ

七 体操ニ於テハ衣服特ニ帶袴ノ仕立方著方ニ留意シ四肢ノ運動ハ勿論呼吸及血液循環ヲシテ自在ナラシメンコトヲ期スヘシ

八 塵埃多キ場所又ハ夏日日光ノ直射スル場所ニ於テ運動セシムルコトハ之ヲ避ケヘシ

九 教授時間外ニ於テモ常ニ生徒ヲシテ其ノ姿勢ニ留意セシムルハ勿論又適宜各種ノ遊戯運動ヲ勸奨スヘシ

十 教授用備品ハ凡次ノ例ニ依ルヘシ

哑鈴、羽子板、羽根、豆囊、毬、輪、綱、くろっけー、ろーんてにす等ノ諸遊技ニ用フル器具

これらは体育に関する教授要目としては不十分である

が、運動教材の学年配当表や教授上の注意を取り上げている点は注目されてよい。この要目は我が国最初の子女の体操要目の萌芽であるといえるであろう。ともあれ内容について検討してみると、そこでは各学年とも体育は毎週3時間とし、「普通体操」と「遊戯」とを課することが求められている。第1・2学年の普通体操は「準備法」、「整容法」、「呼吸法」、「矯正術」、「徒手体操」からなり、遊戯は「行進運動」と「遊技」から形成されていることがわかる。加えて第3・4学年の普通体操は「矯正術」、「徒手体操」、「啞鈴体操」に、遊戯は「行進運動」と「遊技」に分けて教授するものとされていた。

また体操は、普通体操と遊戯が凡そ2対1の割合で課するように規定された。これは遊戯よりも体操を優先としたことを表しており、医学的合理主義に基づいて構成された運動の体系(＝体操)をよしとする考えの反映であるといわねばならない。女・子どもは遊ばせておけばよい、という考えから女といえども鍛えなければならないとする考えの転換を示すものといえよう。さらにまた教授上の注意で、女子の教授は女教員でという要望が初めて示されたこと、身体の定期的異状に対する注意(月経時における体育の禁止、明治33年3月26日、文部省訓令第6号の再確認)、運動と服装に関する注意、教授の回数を毎週凡そ6回としていることなどが示されたことにも注目しなければなるまい。ここに、国が女子体育の振興に本腰を入れたとみることができるからである。

4. 各高等女学校における体育の実際

「高等女学校教授要目」が制定され、「体操科」の教授内容が具体的に提示されたが、それでも当該の要目に沿ってただちに体育の授業が展開されたわけではなかった。国が期待する体育の授業はその期待にそって授業を展開しうる教師を必要としたし、教授用参考図書の刊行を待たねばならなかったからである。そこでここでは、各高等女学校において体育授業がどのように展開されていたのか、を検討することによって、国の女子体育への期待がどのように浸透させられていったのかをみておくこととしたい。これにあたって各高等女学校を前史とする沿革史(誌)をもとに、まずは正課体育を取り上げ、次いで課外体育を点描することにしよう。

1) 正課体育の実際

表-2は高等女学校における運動教材(正課体育)とその頻度をまとめたものである。明治34年の「高等女学校施行規則」と明治36年の「高等女学校教授要目」の両

方によって呈示されている教材がほぼ全国的に実施されていることがわかる。また、徒手体操は全国的に行われており、その著しい普及をみることができる。そもそも女学生に課された徒手体操は保健的体育観(＝医学的合理主義)に立ち、健康で活動的なからだを作る目的で作られた普通体操のうちの1つである。手具を用いなくて四肢や体を動かす簡単な体操である。そのため、激しい運動をすることはならないと考えられていた女学生に対して最適な運動であったといえよう。

いっぽう、徒手体操と同様の運動法の部類とされる軽器具利用の啞鈴体操・球竿体操・棍棒体操などの普通体操も全国的な普及がみられた。このことは愛媛県の松山高等女学校の体育の授業に垣間見ることができる。「体操の時間は…(中略)…徒手体操から上級になるに従い、啞鈴・棍棒・球竿を用い…」²⁸⁾で授業が展開されていたからである。

ついで、「瑞典体操」をみてみよう。この体操は大正2年の「学校体操教授要目」にて規定される教材が、すでに明治期に教授されている点が注目されよう。その実際が不十分であったとはいえ、新しい体操を模索していたことが窺えるからである。

遊戯教材については、その種類といい、内容といい様々なものを見ることができる。これらは当時多数出版されていた遊戯書から適宜選択して実施されていたと推察される。また、これらは運動会の種目として取り上げられるケースも多く、高等女学校には欠かせないものであったことが窺われる。明治期の遊戯教材を「学校体操教授要目」(大正2年制定)の分類に沿って眺めてみるならば、「行進を主とする遊戯」が広く実施されていることができる。「行進を主とする遊戯」には音楽を伴った優美な隊列行進風のもの(プロネードなど)とフォークダンスの類(カドリール・ランサー・コチリオンなど)に大きく大別することができる。その中でもフォークダンスの類であるカドリールは、最も多くの高等女学校において採用されていた。これらのダンスが盛んになった理由は、1つには欧化主義の影響とみることもできるが、なんといってもダンスのもっている女性的な雰囲気やしとやかな動作が当時の社会や女性たちに受け入れられた結果とみなすことができるのである。これらのダンスが多く的高等女学校の運動会において、最も華やかなものとして評判をとったのもこのためであろう。明治39年5月30日の青森県の弘前高等女学校の運動会は、その翌日の新聞(『弘新』)に「雑感」として掲載され、種目毎に批評された。これによるとダンス以下のように評される²⁹⁾。

「なかにも競争の間々に遊戯を為したるが、これは何人にも高尚なる感を抱かむべし、ダンスを為しつゝある生徒も亦同感ならん乎、兎に角余輩は女子の運動中此のダンスの付科せるを喜ぶものなり」

このようにダンスについての感想は好意的なものであったが、これは当時の一般的な受け取られ方であったとされている³⁰⁾。

また、これとは対照的に批判的に評された種目があった。それは前掲の新聞記事にみられるが、「徒歩競争は少々お転婆に過ぎたる観あり」と評されたのである。ここからはダンスに対して評していたような感動はみられない。競走種目に対する当時の世間の対応は冷やかなものであったといえよう。

高等女学校の正課体育の中には「競争を主とする遊戯」として球技などのゲーム的要素の強い競争種目は多くみられる。しかしそのほとんどが「改正学校教授要目」において「球技」や「競争遊戯」として分けられることになる。「走技跳技及投技」として短距離競争や走巾跳び、スポンジボール投げに代表されるような個人としての能力を競う競争の種目はみられない。このことは明治期の高等女学校における体育があくまでも当時の女性規範の範囲内で振興されていたことを示すものであり、当の女性自身も「女らしさ」を破るほどの行動にはいたらなかったといえよう。

また、「ローンテニス」や「ピンポン」や「フットボール」などの教材は全国的なかなりの広がりがみられることも見逃せない。なかでも「ローンテニス」の普及は著しかった。

それではこれらの遊戯教材は、規程（＝「教授要目」）と実際との間にはどのような違いがみられるであろうか。遊戯については「遊戯を授く」という規定のほかに、明治36年の「高等女学校教授要目」の中に、教授用備品がいくつかあげられている点に注目しなければならない。そこでは「教授用備品ハ凡ソ次ノ例ニ依ルヘシ」として「啞鈴、羽子板、豆囊、毬、輪、くろっけー、ろーんてにす等ノ諸遊技ニ用フル器具」があげられているので、それらの器具を用いて行う遊戯を当該教授要目が掲げる遊戯教材に加えられることができるからである。当該教授要目の意図するところが学校現場に十二分に受け入れられてはいなかったようである。

しかしながら、これらの推進にもかかわらず、高等女学校の沿革史（誌）から判断する限り、「ローンテニス」以外の遊戯教材は目立って実施されていたようにはみられないからである。このように遊戯については全国的に

普及されているものもあれば、一部の地域にのみで行われていたものもあり、体操教材とおなじように考えることは難しいといわねばならない。

また、大正2年の「学校体操教授要目」で規定された遊戯教材のうちで、明治期に実施されていたことが確認できた種目はプロネードや鬼ごっこ、羽子つきなどの従来から行われていた遊戯に加えて、デッドボール、セッターボール、バスケットなどの球技であった。

武道として行われた弓道、薙刀などについては大正2年の「学校体操教授要目」で取り上げられているが、これについても明治期からの実施を見ることができる。特に薙刀においては、薙刀体操と名付けて行われているものもあった。これは体操と称することにより、「遊戯」としての薙刀を「体操」の地位まで高めようとしたことを表している。そのように考えると薙刀体操はやはり、遊戯教材の1つとして取り扱われるべきものといわねばならない。

以上のように正課体育をみわたすなら遊戯教材の数が多いので、教材として取り立てようとする試みは多かったとみなすことができるが、学校現場では一貫した裏付けのある体操教材の実施に教育的な指導の重点が置かれていたといえよう。現に明治36年3月9日の「高等女学校教授要目」（文部省訓令第1号）により、体操と遊戯の割合が凡そ2対1で課するよう規定されていることからそれを知ることができる。

また、高等女学校全体の体育を、明治35年4月1日の「中学校教授要目」（文部省訓令第3号）で採用されている中学校男子の運動教材と比較すると、そこには大きな違いをみることができる（表-1参照）。ここでは男子中学生の体育が普通体操と兵式体操の2本立てで考えられ、しかも身体的な効果（＝体育）と道徳的な価値（＝徳育）から眺められている。兵式体操が重視され、遊戯教材にいたっては教授配当表にも掲げられていないのである。この点は女子の場合と明らかに一線が画されねばならないものであろう。

制度的確立後の高等女学校における正課体育では、体操と遊戯を比べると、体操にその重点は置かれていたといえよう。しかし遊戯については、一時期小学校や高等女学校の正課教材として活気ある研究がなされたことも事実である。また遊戯教材については、細かな規定がなされていなかったため、現場の教師にとっては最も創意工夫のなせるものであった。

2) 課外体育の実際

正課体育の教材は一定の基準を「教授要目」によって

示すことができるのに対して、課外における体育・スポーツ活動の方は「教授要目」を通して示すのは難しい。しかし、この課外体育は学校体育の構成要素でもあるので、これを看過して、高等女学校の体育の実際を語ることはできない。男子の場合、明治30年頃になると、中学校以上の学校では、課外スポーツが分化発展していったといわれている³¹⁾。そして、ほとんどの学校では校友会が発足され運動部としての活動が展開された。このような男子の課外スポーツの発展に対し、高等女学校における課外体育はどのようなものであったであろうか。この時代の女子の課外体育については、一般に正課体育の延長として語られることが多いが、実際は必ずしも明らかにされているとはいえない。そこでここでは高等女学校における課外体育の実際を正課体育の延長線上で考察していくことにしたい。

表-3は、高等女学校における課外体育の実際として、各高等女学校で行われていた課外体育活動について示したものである。一口に課外体育といっても、休み時間中の体育・スポーツ活動から放課後の活動、運動会、遠足、登山、クラブ活動など、広範囲におよぶものである。したがって逐次それらの問題を取り上げて検討することはできないが、特徴的な活動に的を絞って検討していくことにしたい。

この時代の高等女学校における課外体育をみていくとき、まずもって取り上げなければならないのは運動会であろう。運動会については、正課体育で行われた体操や遊戯を発表する場として大きな意味を持っていた。しかしながら、単に発表の場として存在したのではなく、運動会が開催されるということは、父兄が学校で行われている体育に注目することであり、また、観客と生徒の関係をも浮き彫りにしうるものであった。ほとんどの高等女学校の運動会において男子生徒の入場を禁止している³²⁾ことは、当時の男女における社会規範をよくあらわしているといえよう。また、運動会において花嫁を物色するチャンスとして捉えられていた父兄が少なからず存在していた³³⁾ということも、当時、女学生の置かれていた立場を示して余りある事実であろう。中等教育機関である高等女学校を卒業する前に何人かは結婚のために中退し、卒業後も就職する者がほとんどいなかった当時においては、女性は「従順」か「美」を売り物にしなければ生きていけなかったであろう³⁴⁾。そういった状況のなかで、規範としての「女らしさ」を打ち破ることは、従順や美を否定することになりうるのである。このようなことを考えると体育振興の問題は女性の社会進出と大きく関わるものであるといえよう。運動会は全国的に多く

の高等女学校において開催されていた。これは運動会の開催がいかに時代の流れに即したものであったかを物語っているだろう。

また、運動会が校友会の実行事の1つとして捉えられている学校も多く、運動会の実施と同時に校友会の結成数の高さも注目される。しかし、当時の校友会は、生徒のみの運営ではとても成り立つものではなく、そのほとんどが教師らの手によって支えられていたようである。このことを考えると運動会とは正課体育の延長上にあり、決して生徒側の自主的な要望を反映するものではなかったといえるのである。

次に通常の学校生活において課外時間に行われた体育・スポーツ活動についてそれぞれの種目をみていくことにする。まず、「ローンテニス」、「ピンポン」は多くの学校において実施されていた。特に「ローンテニス」は最も多く行われていた。例えば、埼玉の浦和高等女学校においても「庭球」が盛んであったことが確認されるのであるが、この学校に庭球が熱心に行われていたという事実は、新聞の記事によって確認することができよう。そこには「当時は庭球が女子に最も適するスポーツとして奨励され、特に第5代校長大久保介寿氏（明治38年着任）は女子にも運動が必要であることを提唱し、高女、女師両校生徒にその主義をもって当った」のであるが、「校長みずからラケット振り、昼休みに生徒が教室に残ることは許さなかった」（『埼玉新報』記事によると記述されているのである）³⁵⁾。

また、広範囲に渡ってその実施をみることができる、「ローンテニス」や「ピンポン」の場合、その種目による校内競技大会が開催されたり、クラブとして組織されていた点は注目される点である。

次いで、課外体育として遠足、登山、海水浴、修学旅行などの行事に注目してみたい。まず、遠足はかなりの地域で実施されていることがわかる。これはそれらの年間行事のうちでは最も手軽に実施ができるものであるといえよう。登山も同様であった。

札幌高等女学校では登山を体育の奨励方法として実施していたといわれている³⁶⁾。この女学校では明治36年10月27日に最初の登山が決行されているので、比較的早い時期から、登山が課外活動として行われていたということができよう。また、明治42年10月2日、3日にはお山参詣の他に山の観察、身体鍛練のためとして青森県の弘前高等女学校が登山を決行しているのも見逃せない。というのは当時の女学校において「登山」は手短な課外体育活動とみなされていたと推察されるからである。

以上、明治期における高等女学校の課外体育活動を眺めてきたわけであるが、要するに課外活動の中心はやはり運動会におかれていたといえよう。これに続くのが遠足や登山であり、日常の課外体育活動としては「ローンテニス」や「ピンポン」が主流であったといえよう。しかし、このように課外での体育が高等女学校で奨励されようとも、男子の中学校における課外活動とは比較にならないほど、低調であったといわねばならない。

5. おわりに

本研究の目的は日本が近代国家建設に向かった明治期において女子の体育が高等女学校を介してどのように展開されたのかを明らかにし、併せて女子体育にとって「近代」とは何であったのかを考察することであった。その結果を若干の所見をまじえて整理すると以下のようになる。

明治期における高等女学校の体育は「健康」という視点から奨励された。健康な身体を育成するための手段としての体育が奨励されたのである。しかし、その健康な身体は個人のために維持・増進されねばならないとするだけにとどまらず、近代国家建設のために獲得しなければならぬものとして国家から期待されたのである。

女子が丈夫な身体を所有すれば、結婚してから丈夫な子どもを出産でき、その子どもが丈夫に成長すれば立派な軍人が出来上がる。近代国家の一員である国民は自らの国を防衛する義務を有しているがゆえに、国民皆兵主義に則った強兵の確保は国の責任でもあった。そのため、将来の軍人を産み落とす女性の身体が丈夫でなければ、丈夫な身体を所有した軍人からなる軍隊の編成は難しいことになるわけである。

このような立場から国は女子に対しても体育を積極的に奨励するようになり、身体を運動させることに消極的な明治の女学生たちに国づくりという大義名分をもって運動させたのである。高等女学校における体育の奨励とはそのような時代の期待に応えるものであったといえよう。

したがって、地域によっては若干の相違はあったが、どの地方でも高等女学校では体育が熱心に奨励されていたといわねばならない。このことは国の体育奨励の意図が地方にまで徹底して浸透していたことを意味するが、同時に女性の身体を国家的管理が高等女学校という枠組のなかで行われたことを物語っているといえよう。このように明治政府は国民国家建設のために、「良妻賢母」という伝統的な女性観を「西洋流」、即ち「近代的」に読みかえ、女性の身体をも動員させたということができよう。

注記及び引用・参考文献

- 1) この問題に関しては、岸野雄三：日本における近代化『文科系学会連合編集』第19巻所収、東京美術出版局、1969年、p. 126や谷釜了正：女子体育の振興とナショナリズム『体育の科学』第39巻9号、1989年、pp. 719-723によって研究されている。
- 2) 三浦雅士：『身体の零度』講談社、1994年など。
- 3) 女子の場合、1年から4年までは週に3時間、5年と6年は2時間と規定されていたように男子との時間数にも違いが見られる。
- 4) 岸野雄三・竹之下休蔵：『近代日本学校体育史』日本図書センター、1983年、p. 63。
- 5) 岸野雄三・竹之下休蔵：前掲書、p. 63。
- 6) 岸野雄三・竹之下休蔵：前掲書、p. 72。
- 7) 三浦雅士：前掲書、1994年、p. 157。
- 8) 小山静子：『良妻賢母という規範』勁草書房、1991年、p. 48。
- 9) 小山静子：前掲書、p. 40。
- 10) 岸野雄三・竹之下休蔵：前掲書、p. 42。
- 11) 岸野雄三・竹之下休蔵：前掲書、p. 42。
- 12) 中条澄清：体育に就て『大日本教育会雑誌』第160、161号、1895年、pp. 8-18, pp. 20-25。
- 13) 西久 栄：富強強兵時代の女子体育『東京家政学院紀要』第7号、1967年、p. 119。
- 14) 岸野雄三・竹之下休蔵：前掲書、p. 43。
- 15) 学校法人日本体育会百年史編纂委員会：『学校法人日本体育百年史』学校法人日本体育会、1991年、p. 1332。
- 16) 丸山正彦：女子の体育『内外名家体育論集』所収、日本体育会、1902年、p. 35。
- 17) 「久保田文相の演説」『教育時論』第695号、1904年、p. 32。
- 18) 岸野雄三・竹之下休蔵：前掲書、p. 43。
- 19) 教育史編纂会：『明治以降教育制度発達史』第4巻、教育資料調査会、1938年、pp. 278-276。
- 20) 教育史編纂会：『明治以降教育制度発達史』第3巻、教育資料調査会、1938年、pp. 284-286。
- 21) 小山静子：前掲書、p. 51。
- 22) 教育史編纂会：『明治以降教育制度発達史』第4巻、教育資料調査会、1938年、p. 157。
- 23) 教育史編纂会：前掲書、p. 25。
- 24) 教育史編纂会：前掲書、pp. 278-282。
- 25) 教育史編纂会：前掲書、p. 284。
- 26) 教育史編纂会：前掲書、pp. 285-294。
- 27) 教育史編纂会：前掲書、pp. 340-342。
- 28) 創立八十周年記念誌編集委員会：『八十年のあゆみ』愛知県立松山南高等学校、1971年、p. 39。
- 29) 校誌編纂委員会：『八十年史』青森県弘前中央高等学校創立八十周年記念行事実行委員会、1980年、p. 88。
- 30) 校誌編纂委員会：前掲書、p. 59。
- 31) 岸野雄三・竹之下休蔵：前掲書、p. 59。
- 32) 当時の風潮として「男女7才にして席を同じうせ

ず」の考え方が深く浸透していた。

- 33) 青森高等学校史編纂委員会：『青森高等学校＝無限＝』青森高等学校，1974年，p. 76.

- 34) 小倉千加子：『セックス神話解体新書』学陽書房，

1988, p. 55.

- 35) 浦和第一女子高等学校 80 周年記念誌編纂委員会：『創立 80 周年記念誌』埼玉県浦和第一女子高等学校，1980 年，p. 199.